



號五十四第 月六年六十和昭 行發日十 行發日十・回一月每 錢五金部一價定誌本 錢拾六金(共稅)年一 一才 田杉 監發行發 人影印製 一ノ七西區區區橋京市京東 社信通盟同 所行發

職員會青年團に就いて

社長 古野伊之助



去る一日の興亞奉公日定例訓練において、古野社長は近く設立を見る筈の本社職員會及び青年團の兩組織に就き、その目的、趣旨等を説明した左は當日の講演速記の一部である。

組織と人

我が同盟は世界各國の孰れの通信社に比しても、最も完全なる組織が整備されて居るものであると自ら誇つて間違ひはないと思ふのであるが、然し此の誇るべき我同盟の組織も動かすのは結局人である。

如何なる立派な組織、如何なる立派な機關が出来て居ても之を動かすものは人間である。之を動かす人間がしつかりして居なければ

どんな組織も、どんな機構も、何の役にも立たぬものになつてしまふ。

今回設立せんとする職員會も青年團も、本當の目的をよく意識し認識して、そして其の運営の掌に當る人に適當な人間を得れば、此の組織も非常な成果を収めることだらうと思ふ。

何處に眼をつけるか

組織が出来上れば、早速社は諸君に聞きたい問題を幾つも提出するであらう。社業の改善、刷新、同盟が此の現今の時局に直面して重大任務を持つて居るのに對して今の社の仕事をどんな方向に改善し刷新すべきかといふ考へを全社員から一つ聴取したいと思ふ。それから仕事の上に能率増進等について積極的な建議などとして聞きたい。

日本人の一番大きな缺陷は、全體を考へる、全體を見る明が無くて、兎角個人個人が一人一人、自分の小さな部分的立場から物を考へて居る、といふことにある。どこまでも全體から部分、といふ考へ方に立ち歸つて、社員一人一人、同盟は我等の同盟であると言ふ認識に立つて考へるやうになれば、

そこに本當の協力が生れて来るものであり、又各人各人の、職員一人一人の將來とか、その立場といふものも打開されてゆくのである。

兎角横に這つてはいけぬ。私は横に這ふことは止めて前に進め斯ういふことをよく申すが、私自身は三十年近く通信事業に關係して居るが、私のとつて来た態度は一貫して横に這ふことを止めて前進することであつた。

乍併人はともすれば、部長が誰だから駄目だとか、誰々が辭めたら部長に代つて誰がどうなるだらうとか、そんな馬鹿氣なことを言つたり氣にしたりするが、そんなことは一切止めて、已は何をなすべきか、同盟社員として何をなすべきかの修養を積み、絶へず自分の職責を遂行することに熱中することだ。でないと人がどんどん先へ越して自分は後塵を拜することになつてしまふ。

部長の機嫌を窺つたり要領で働いてゐるものは、結局マゴ／＼しながら、何か問題にぶつかると倒れてしまふか又は取残されてしまふ。そういふことが私の過去の體驗に於て眞理である考へるのであるが、同盟社員諸君に對して私は常に此の心掛を忘れてはならないといひたい。

絶へず前に進むことを考へ、自分の與へられた職責を如何に立派に果してゆくか、といふことを考へ、夫々の職域に於いて前進してゆくことに心構を持ち努力すべき

だと思ふ。誰々は早く主任になつたが自分はなれぬとか、自分の仕事は面白いか面白くないとか、自分の受持がつまらぬとか、そうした無駄なことに拘泥してマゴ／＼して居ると結局下積になつて行く、斯んなふうには私を考へる。

何をやるか

そこで一人一人の社員が先づ全體を考へ、同盟が如何なる目標に向つて何をなさねばならぬといふ見地から、自分の眼の届く所で、自分の手の及ぶ所で、斯うもしたらあつたらぬといふことを、盛んに建議して來るといふことが出来る仕組をつくつて行きたい。

そして此方からも亦色々諸君にお尋ねしたい問題を提出するが、自發的に社業の改善をはかり、その刷新について何處までも我等の同盟である、同盟が社長の仕事でなければ又幹部の仕事でもない一人一人が同盟を建設的にやつて行く、そういふ意識に立つて盛んに積極的、建設的な意見を提示せられることを大いに期待して居る譯である。

それで能率増進、仕事の遣り方についても、夫々の受持の分野に於て行ひたい事を提案して、それが施行されて實際に施設として實現するといふ方向に行きたいと思ふ。

従つて又そうした社業全體といふ立場から色々建議すると同時に社員自體の福利増進を圖るところの相互の共濟制度とかいふものについても、遠慮なく提案して貰ひたい。

誰がやるか

同盟は誰かが此の組織を踏み臺にして利益を得るものでもなければ、又此の組織を基礎に出身出世するものでもなく、國の爲めに國民の爲に重大な使命を達成してゆく所なのである。だから此の仕事に参加して居る同志三千の一人一人は本當に自分の生活、それから自分の將來といふものに充分の安心を持つて、そして力一ぱい働いてゆくと言ふことが、可能なやうに、仕組んでゆかなければならぬ。

結論

他の商會社などでよくあるやうに、重役に脱まれたから俺の首はどうなるかと、部長に叱られたから出世の妨げにならうとかいふやうなつまらぬものゝ考へ方、我々はそんなことを考へる必要は絶対にないのである。そういふ明るい朗かな團體に育てあげてゆかなければならぬ。一面に又自分の職責の遂行、任務の達成といふことに何等の懸念なく率先してゆけるやうな仕組にしてゆかなければならぬ。

私自身としては我々社員の生活安定とか向上については、絶へず社全體の立場の許す限り力を注ぎたいと考へ、我々で出来る限りのことを工夫して居る譯である。だがこれは到底私一人や若くは理事とか常務理事といふ連中の頭位で駄目なのである。社員全體が俺達の將來をと本當に眞剣に考へて向上させ、同盟の發展のため考へて良い考へがあればどしどし申出て貰ひたい。之を着着實現に移してゆくことに何等の躊躇するものではないのである。

又班長は十人のために骨を折り協議員は百人、此の全體の推薦區のために大いに骨を折らなければならぬ、そういふ氣持が諸君の胸の中に強く燃えて居れば此の組織は期せずして力強いものとなつてゆくことゝ信ずる。つまりこの組織と運用とは同盟が今直面する國家的使命、任務の遂行に遺憾なきを整へることにある。

提示なり交換なり行はれてゆくやうにと思つてゐる譯であるが、自分の考へを社の首脳部に通ずるの機会を少い人々により多くの機會を與へたいといふことを考へたから、班長になる人には局長、局長、部長、参事、之だけは除くことにした。勿論局長、局長、部長、参事も全部何れかの班員であるには違ひない、一人残らず全部何班かの班員であるといふことは當然のことである。それから斯うした班長、協議員等の任期を一年に限つて、之を重任させないといふことにした。それは全體のために骨を折るといふ仕事を夫々或一定の人に限定させない、即ち皆が我々の同盟だといふ意識を持つて、代る／＼其の任に當つて異なる機會を與へたいといふやうな考へからそうしたのである。

主たる點は大體そんな所であるが半年か一年運営してみてもどれ位の成果をあげるか、それを見た上で必要な修正なり改善をはかることは一向差支へないと思ふ。同時に之は第一回の試案とも見るべきものであるが、之が果して所期の目的を完全に達成するや否やといふことで、諸君が如何に全體の立場に立つて社の使命を認識して居るか、ちつぽけな自分だけの立場にマゴ／＼して居るかどうかが分る。

人事 (五月)

海外へ

山村紀雄(大阪)
中支へ
安本宜雄(大阪)
北支へ
山田幸吉(通信)
ハノイへ

海外より

村上正躬(紐育)
小糸忠吾(同)
編輯へ

国内

吉川義章(名古屋支社長)
名古屋支社編輯部長兼務を命ず
小野利幸(大阪編輯部次長)

京城支社編輯部長へ
坂田東助(京城通信主任)
京城通信部長へ
古津四郎(京城編輯主任)
京城地方部長へ
久保田清松(調査)
大阪支社編輯部長へ
奥宮正澄(總務局參事)
調査局參事へ
村上暉雄(松山)
通信へ
大西保太郎(大阪)
編輯へ
池見博吉(通信)
廣島へ
中村信(編輯)
調査へ
田崎與喜衛(調査)
編輯へ
住谷新市(經濟)
大阪へ
富田正章(通信)
總務へ
高島修三(經濟)
若杉修介(總務)

編輯へ
大橋博(總務)
經濟へ
長島國彦(編輯)
林祐次(通信)
小關藤一郎(編輯)
小西福一(關門)
平野正一(臺南)
烟藤義一郎(經濟)
社員とす
越前谷セツ(總務)
森才(通信)
元田初實(福岡)
山下政子(鹿児島)
橋本彌榮子(總務)
竹下うめ子(總務)
准社員とす

新入社

大坪正治(編輯)
長濱純一(同)
佐々木仙一(通信)
關岡榮三(編輯)
田中清市(同)
藤井正己(下關)
木原隊(福岡)
大脇孝(大阪)
大河平隆直(通信)
村上健三(名古屋)
弘田讓(岡山)
中尾日出輝(熊本)
高橋勉(旭川)
田中菊江(總務)
宮治正憲(名古屋)
佐竹新(平壤)
退社
折橋慶治(總務)
伊藤省吾(編輯)
服部末吉(大阪)
猿橋進(福岡)
遠矢博臣(大阪)
伊藤千代子(名古屋)
岡田君子(同)
岡谷豹三(北支)

互助會報告 (五月)

山崎利夫(札幌)
依願解職
其 他
工藤義一郎(經濟)
金谷貞次郎と改姓名
大石明瑞(京城)
大石實と改名
村山有(通信)
直井洌(同)
山内利三(同)
休職
山崎利夫(札幌)
解職

結婚

東野貞雄(通信)
井關納(大阪)
大森勳(關門)
田浦義光(編輯)
井上茂(京都)
永井隆(廣島)
義村正三(松山)
田島義夫(編輯)
兒島又喜(熊本)
北澤正也(經濟)
松尾義雄(編輯)
大澤滋(調査)
宮川卓二(編輯)
山下近次郎(福岡)
西部敬一(編輯) 會員外
入 營
宇都宮要(中支) 第一子
山田清一郎(同) 第一子
末永房太郎(大阪) 長女
宮川節夫(高知) 四女
横井雄一(編輯) 長男
田田浩(福岡) 四女
諸岡一男(大阪) 二女
三輪孝平(大阪) 長男

羽入義雄(札幌) 長女
横山榮光(長崎) 長男
横地倫平(編輯) 長男
飯塚照二(同) 長男
田中耐吉(編輯) 長男
古川貞市(桐生)

細波孝(通信) 三男死亡
福井誠正(福井) 祖父死亡
上杉憲治(熊本) 夫人死亡
山片紀雄(大阪) 母死亡
山野強介(同) 祖母死亡
村取末三(經濟) 實姉死亡
鈴木傳三(大阪) 實弟死亡
伊藤次雄(新潟) 父死亡

退社

猿橋進(福岡)
服部米吉(大阪)
遠矢博臣(同)
瀨下定枝(總務)
伊藤省吾(編輯)
伊藤千代子(名古屋)
岡田君子(同)
西村市子(京都)
加藤定行(仙臺)

海外支局開設

今般左記にスラバヤ支局を開設
同盟通信社スラバヤ支局
支局長 俣野博夫
Donnei Tsushin Sha
c/o Tokyo Hotel,
No. 1 Koningsmelaan
Soerabaya Java.
Cable address:
Soerabaya Donnei

人事往來

五月三日 吉川名古屋支社長上京
五日 同歸社
十五日 上田常務熊本へ
二十一日 同歸京
三十一日 松方中支總局長上京
六月二日 青木福井支局長上京
同日 古野社長名古屋へ
同日 同歸京

本社を見學

横濱支局便り

東京とは目と鼻との間の横濱で
同じ報導報國の使命に邁進してゐる支局長が、未だ一度も本社に行つて見た事がないので、使命達成上からも缺けるところもあらうと五月十日支局長(娘子軍)一行本社參觀に上つた。
曠見外經部長初め皆様の御好意と懇切なる御説明とにより、躍動する同盟本社の状況を詳細に亘り見學させて戴き一同大いに社務に對する認識を深めて歸つた。
御多忙中の皆様に御迷惑をおかけした事を御詫びすると共に御教導下さいました諸氏に厚く御禮申上ります。

本社一部臨時移轉

銀座西七丁目目電通ビル、同裏新館 西八丁目別館等に分散執務を行つてゐる本社では、最近社務膨張のため狹隘を感じ、去る五月十九日出版部(別館)が日比谷公園角の市政會館四階へ移轉した。次いで調査局情報部、特信部も十四日同所へ移轉